



未来型医療創造
卓越大学院プログラム

Advanced Graduate Program for Future Medicine and Health Care

2022 年度 医療概論レポート

4 期 A グループ

1. 授業前の知識

本グループは社会学・免疫学・歯学という異なるバックグラウンドを持ち合わせている学生で構成されている。よって、医療に関する知識はそれぞれ幅が異なっている。

2. 授業の目的（「医療概論」シラバス改変）

「FM 医療概論」の目的は、文理を問わず様々な学問分野の知見や手法を医学分野と融合させるため、基本的な医学知識や最先端医療、その実践について理解することである。また、現代医療の問題点と未来への展望について、講師や各受講生の多様な視点を交えた考え方に触れることである。

3. 到達目標（「医療概論」シラバス改変）

医学的知識のみならず、医療の実践についての想像力、洞察力、基礎医学と文系理系の枠にとらわれない横断的思考力、複雑化するグローバル社会での応用力を育むことにつなげる。

4. 授業内容

授業内容は以下に示すとおりである。

- 第 1 回画像診断学総論（高瀬圭教授）
- 第 2 回遺伝学とゲノム医療への展開（青木洋子教授）
- 第 3 回最新の循環器デバイス治療（安田聡教授）
- 第 4 回慢性痛の本質と治療（山内正憲教授）
- 第 5 回他者との共感・医療とコミュニケーション（直江清隆教授）
- 第 6 回人体の構造とはたらき（大和田祐二教授）
- 第 7 回生活習慣病におけるゲノムサイエンス（酒井寿郎教授）
- 第 8 回代謝疾患研究の最前線（片桐秀樹教授）
- 第 9 回マクロ経済から見た医療費：医療の技術進歩と医療費（湯田道生准教授）
- 第 10 回口から見た地域と社会の健康のための処方箋（小坂健教授）
- 第 11 回生活を支えるリハビリテーション医工学（出江紳一教授）
- 第 12 回医療を支える医工学（金井浩教授）

5. 研究や仕事などに生かせる点

(A) 私は政府支出の世論を研究テーマにしているため、医療経済学の授業における、エビデンス・ベースで政策を考えるという点が非常に参考になった。あいまいな望ましさや、経路依存によらない、経済性を基準に政策を形成することは、現在でさえEBPMの必要性が声高に叫ばれているため、今後より重要になると考える。

授業ではコブ・ダグラスの生産関数を用いた医療費の要因分析の解説を行っていた

だき、弾力性について参考になった。私の研究でも線形モデルを用いるが、弾力性（独立変数が1単位変化すると従属変数が何パーセント変化するか）についてはこれまで用いてこなかったため、今後の分析結果の解釈に用いたいと思った。

(B) 医療概論を通して実験データの解釈や研究に対するマインドが非常に参考となった。一見、複雑な実験結果が得られた場合に丁寧に紐解くことで重要な知見に繋がった例を聞いたことから、自身の研究結果についてポジティブデータだけではなくネガティブデータも複合し事象の全体像から分子レベルの詳細な仮説を考察するきっかけとなった。

(C) アイディアで学問を変えられるという発想力は医療概論の講義を通して培われた。新たな発見が意義深いということを世界に発信する論理構築力が大切であると学んだ。研究成果を公表する上で主観的になりすぎず、客観的にどのような社会的意義があるのかを伝えられるかどうか重要になると感じた。

また、放射線の画像診断を利用した低侵襲治療法について患者さんの実際の治療の様子について追った動画を拝見したが、患者さんファーストの考え方がより体に優しく、そしてより発展的な治療方法の開発に結びつくのだと実感できた。

6. 影響を受けたこと

(A) 影響を受けたことは、専門外の学生に対するわかりやすい説明の仕方だ。特に医療経済学の授業における、経済学の概説が印象的だった。専門外である経済学に対し、私はなんとなくとっつきづらい感覚を抱いていたが、「効用ベースで物事を考える学問だ」「人の幸福に関心がある」という経済学の関心を説明していただいたため、その後の話がスッと入ってきた。

この経験から、前提知識を共有していない人に対して学問の話を行う際に注意すべきことは、細かい説明ではなく何を知りたい学問でどのように行うのか、ということをはじめに端的にまとめることが重要であると思った。今後、専門外に対して研究発信を行う際は、この点について気を付けようと思った。

(B) 真に優秀な研究者が備えている能力について意識するようになった。例えば、研究結果の発表において然るべき場で発表することの重要性について学んだ。片桐先生による臓器間ネットワークの発見は革新的なため論文のアクセプトに長い時間を有したがリジェクトに一つ一つ対応することでトップジャーナルでの発表となり、その後の代謝研究に大きな影響を与えていることなどを聞いた。このことから、真に優秀な研究者になるには研究の質以外に発表する場にこだわることや、論文の執筆など実験手技以外の技術が非常に重要だということ学んだ。

(C) 特に印象に残っているのは医療経済学ならびにコミュニケーションの講義である。医療経済学の講義では医療費上昇の要因分析を行った結果、「国民所得の上昇」「医療分野と他分野の生産性上昇格差」がそれぞれ約 4 分の 1 寄与している点が印象に残った。技術の発展とともに医療費も増大してきているが、疾患を抱えている人もそうでない人も一定の保険料がかかっている。団塊世代が後期高齢者となる時代を迎えるのに備え、医療保険や介護保険の負担を誰がどれくらい背負うのかは調整が必要になる時に差し掛かっていることを実感した。

そして、コミュニケーションの講義では「共感ができない人はサイコパス」という講義冒頭の言葉が印象に残った。普段の診療の中で気を配っていることだが、共感的態度を示すことが患者さんとの信頼関係を構築する上で最も貢献していると考える。患者は医療サービスの消費者であり、「見知らぬ人」＝「異」としてみなすこともできるが、完全に「異」とみなしてしまうと、距離や壁があるような関係になるため、共感をもってしてはよい距離感を築くことが重要であるように考えた。

7. 授業の限界・来年度以降の改善点

本講義において、講義内容はやや専門的な内容が多く、医療の専門用語が頻出してくるのは改善点である。基礎的な医学内容のみならず専門的な内容にフォーカスした授業もあったため、医療の概略を学ぶことが意義である本講義ではさらに平易な内容が求められるのではないかと考えられる。

また、解剖学のような実践的な講義が更にあっても興味深いのではないかと思った。短時間で履修する中で体感的に学習できるような場や見学の機会があると望ましい。

さらに、本講義の趣旨は、現代医療の問題点と未来への展望について、講師や各受講生の多様な視点を交えた考え方に触れることでもある。現在の医療における問題点に焦点を当てた講義はなかったため、医療制度や医療体制について学ぶ講義を受講し議論する場があってもよかったのではないかと考える。

8. まとめ

本講義では基礎医学やコミュニケーション、経済学、医工学と多岐にわたる専門分野の先生からそれぞれの実状や研究について講義いただいた。一連の講義を通して、自分の研究や仕事に生かせる考え方、視点を学ぶことができた。

既成概念の枠に囚われず、未来型医療について思考を巡らせ、複雑化するグローバル社会に適応しながら、課題解決に貢献できるように取り組んでいきたい。また、文理を問わず他の分野と医学を融合させるために、分野の壁を超えた共同連携についても模索していきたい。